

# 描かれた病

## — 『枕草子』と『源氏物語』に見る典型 —

小笠原愛子

### The Descriptions of Illness — Archetype Found in *Makuranososhi* and *Genjimonogatari* —

Aiko OGASAWARA

#### Abstract

In *Makuranososhi*, one chapter enumerates diseases, beginning with “The disease ...”. The diseases listed there are lung disease, diseases caused by an evil spirit, leg troubles, and anorexia of unknown cause. These diseases are consistent with the sympathetically described diseases that the main characters suffer from in *Genjimonogatari*, the contemporary literary work, while they are different from those actually feared in those days. This is because the both descriptions of illness in these two works reflect the aesthetic in the period, and the descriptions have been passed down to posterity as a typical example in literary works.

Keywords: illness 病, depiction 描写, archetype 典型, *Heian period* 平安時代,  
*Makuranososhi* 『枕草子』, *Genjimonogatari* 『源氏物語』

#### 1. はじめに 『枕草子』「病は」

『枕草子』には、「病は」として、体調不良の様態を列挙する箇所がある。

〈『枕草子』 病は〉

病は胸<sup>(1)</sup>。物の怪<sup>(2)</sup>。あしの気。はては、ただそこはかたなくて物食はれぬ心地。

(『枕草子』 一八一「病は」318)<sup>(3)</sup>

これらの「病」が、どのような病として挙げられているのかは明記されておらず、この部分だけから解釈するのは困難である。当時貴族社会で一般的に知られていた症状であることは確かだが、肯定的評価をしているのか、否定的評価をしているのかも分明的でない。「病」という項目の性質から、特に厄介で苦

しい病に言及したとも考えられるし、当時罹患者が多かった病を列挙しているとも考えられる。また『枕草子』の他の類聚的章段、特に「名詞+は」で始まる章段に列挙されているのが、概ね好ましい事例・様子であることから、患う姿に風情を感じる病とも考えられる。

三卷本・能因本・前田本の系統では、この直後に、若く美しい女性が歯痛に苦しむ姿態<sup>(4)</sup>と、おそらくは帝寵を被っている女房が胸を病む様が魅力的に描写されている<sup>(5)</sup>。〈歯痛に苦しむ女性と、胸を病む女性の描写〉

十八、九ばかりの人の、髪いとうるはしくて、たけばかりに、裾いとふさやか

なる、いとよう肥えて、いみじう色白う、顔愛敬づき、よしと見ゆるが、齒をいみじう病みて、額髪もしとどに泣き濡らし、乱れかかるも知らず、面もいと赤くて、おさへてゐたるこそ、いとをかしけれ。

八月ばかりに、白き単衣、なよらかなるに、袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあてやかなるをひきかけて、胸をいみじう病めば、友だちの女房など、数々来つつとぶらひ、外の方にも、若やかなる君達あまた来て、「いといとほしきわざかな。例もかやうにやなやみたまふ」など、事なしびに言ふもあり。心かけたる人は、まことにいとほしと思ひ嘆きたるこそをかしけれ。いとうるはしう長き髪をひき結びて、物つくとして、起きあがりたるけしきも、らうたげなり。

上にも聞しめして、御読経の僧の、声よき、給はせれば、几帳引き寄せてすゑたり。ほどもなきせばさなれば、とぶらひ人あまた来て、経聞きなどするも隠れなきに、目をくばりてよみみたるこそ、罪や得らむとおぼゆれ。

(『枕草子』一八一「病は」318～319)

この、「齒痛に苦しむ女性」と「胸を病む女房」の描写に関連づけて、「病は」と列挙されているものも、病苦の様に魅力を感じるものであるとする注釈もある<sup>(6)</sup>。

ここで言及されている「病」がどのようなものとして挙げられているのかを断じるのは難しいが、少なくとも言及するものも憚られるほど恐ろしい病、或いは嫌悪を感じさせるような病ではないことは確かであろう。例えば、『枕草子』が成る直前の正暦年間(990～995)にも猛威をふるった疫病(疱瘡)等は、前近代の世界においては最も恐れられていた病であろうと考えられるが、ここには挙げられていない。しかし、『枕草子』の他の箇所には、疫病流行中に親が体調不良を口にするのが「むねつぶるるもの」と言及され

ており、恐ろしい病として認識されていたことは確かである。

〈『枕草子』胸つぶるるもの〉

胸つぶるるもの。競馬見る。元結よる。  
親などの心地あしとて、例ならぬけしきなる。まして、世の中などさわがし<sup>(7)</sup>と聞こゆるころは、よろづの事おぼえず。  
また、物言はぬちごの泣き入りて、乳も飲まず、乳母の抱くにもやまで久しき。

(270)

ここで疫病への恐れが語られていることと、「病は」として疫病が挙げられていないこととを併せ考えると、やはり「病は」として列挙されているものは、「特に恐ろしい病」ではないとはいえるであろう。

## 2. 『源氏物語』主要人物の病

『源氏物語』には、病床に伏す主要登場人物も多数存在する。その中で、「病」の具体的な症状を描写される例を確認すると、それらはいずれも、前節で見た『枕草子』「病は」に列挙されていた「病」、つまり、「胸」「物の怪」「あし」「ただそこはかなくて物食はれぬ」のいずれかの症状なのである。

『源氏物語』が、わずかに先行する『枕草子』を強く意識していたであろうことは、夙に論じられており<sup>(8)</sup>、風景描写や主要人物の家族関係等について、類似が認められる点や、『源氏物語』による『枕草子』批判と見える点等が多々指摘されている。ただし、本稿で取り上げる『源氏物語』における「病」関連の言及・描写は、直接の引用や批判ではあるまい。『源氏物語』に、病を列挙する、或は病について論じるような箇所があるわけではないし、先述のように、『枕草子』は列挙した病について明確な価値判断を述べておらず、『源氏物語』がこれらの病を取り上げて『枕草子』への批判を試みたとも考えにくいからである。

『源氏物語』中の主要登場人物の罹患する

病が、『枕草子』で「病は」として挙げられているものと一致することは、影響関係というより、ほぼ同時代に成った作品の持つ共通点として意味があると考えられる。加えて、『枕草子』が明言しなかったこれらの病への価値判断を、『源氏物語』を通して考えることもできるのではないだろうか。以下、症状別に確認していきたい。

## 2.1. 「胸」

『源氏物語』において、胸を病む様が詳しく描写されるのは藤壺宮と紫上である。両者は、光源氏が特に執着した女性達であり、作中でも比類ない理想性と魅力を体現した人物として描かれている。彼女らが「胸をなや」むことになった直接の原因は、いずれも源氏である。

藤壺の宮は、所生皇子（後の冷泉帝）の将来の為に源氏との男女関係を断つ必要があり、彼を拒否し続けていた。それにもかかわらず、源氏が強引に藤壺宮の部屋に侵入して関係を持つとしたため、藤壺宮は「御胸をいたうなやみ」「御氣あがり」という状態になる。

〈藤壺〉

（源氏は）まねぶべきやうなく聞こえつづけたまへど、宮いところよなくもて離れきこえたまひて、はてはては御胸をいたうなやみたまへば、近うさぶらひつる命婦、弁などぞ、あさましう見たてまつりあつかふ。男は、うしつらしと思ひきこえたまふこと限りなきに、来し方行く先かきくらす心地して、うつし心失せにければ、明けはてにけれど出でたまはずなりぬ。

御なやみに驚きて、人々近う参りてしげうまがへば、我にもあらで、塗籠に押し入れられておはす。御衣ども隠し持たる人の心地どもいとむつかし。宮はものをいとわびしと思しけるに、御氣あがりて、なほ悩ましうせさせたまふ。

（賢木 ② 107～108）<sup>(9)</sup>

源氏が、藤壺宮の拒絶の意思を尊重せず、強引な行動を取ったことが藤壺宮の不例の原因である。

この後、藤壺宮は源氏の懸想をとどめつつ、彼に冷泉帝の後見を続けさせるために出家する。なお、藤壺宮はこの後8年ほどの歳月を生きており、この胸の患いが直接の死因ではないが、一方で彼女の死因となった病が何であるのかは語られていない。

次に、紫上の場合を確認する。紫上は、源氏の多くの女性関係に悩み、女三宮降嫁によって正妻格の地位をも奪われて、なお源氏の妻として世間体を取り繕い続けなければならない生活に疲弊する。そして、どんな女にも最終的には「よる方（＝よりどころ）」が与えられるといわれているのに、自分は「あやしく浮きて（納得のいかないことに、不安定な身で）」過ごしてきた、このまま耐え難い物思いから解放されぬまま生涯を終えるのであろう、と絶望しつつ就寝した翌未明、胸を病んで苦しみ始めるのである。

〈紫上1〉

……など思ひつづけて、夜更けて大殿籠りぬる暁方より、御胸をなやみたまふ。……たへがたきをおさへて明かしたまひつ。御身もぬるみて、御心地もいとあしけれど、院もとみに渡りたまはぬほど、かくなむとも聞こえず。

（若菜下 ④ 212）

紫上の発病は、源氏に裏切られ抑圧され続けた彼女の極まった疲弊と絶望を表している。彼女はその後回復することなく、長患いの果に死ぬのである。

藤壺宮と紫上が患ったのが同じ病であるとは考えにくい。しかし彼女らが「胸をなやみたまふ」た原因は、いずれも源氏が彼女らの切実な願いを尊重せず、尊厳を傷つけたことである点は共通している。

なお、後項で「物の怪」による病として確認する葵上の例にも、病の症状は「胸をせき

あげ」というものであることが述べられている。

## 2.2. 「物の怪」

『源氏物語』には、「物の怪」による不調は無数に語られている。その中で、主要登場人物に害を為す物の怪の様子が相当の紙幅を割いて詳述される例は、以下に上げる4例である。いずれも女性で、物の怪によって落命する様が描かれるのが夕顔と葵上、仮死状態になったのが「胸をなやみたまふ」た後長患いに在った紫上、一命をとりとめたが出家したのが女三宮である。

夕顔は、お互いに身分を隠して逢瀬をもっていた源氏によって廃院へ連れ出され、そこで物の怪に襲われて絶命する。何か他の病気を患っていたという描写もなく、突然兇悪な物の怪によって命を奪われたという、怪奇な現象として描写されている。

〈夕顔1〉

宵過ぐるほどに、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女あて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで、かくことなることなき人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつらけれ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。物に襲はるる心地して、おどろきたまへれば、灯も消えにけり。

(夕顔 ① 164)

〈夕顔2〉

帰り入りて探りたまへば、女君はさながら臥して、右近はかたはらにうつ臥したり。……かい探りたまふに息もせず。引き動かしたまへど、なよなよとして、我にもあらぬさまなれば、いといたく若びたる人にて、物にけどられぬるなめりと、せむ方なき心地したまふ。紙燭持て参れり。……「なほ持て来や。所に従ひてこそ」とて、召し寄せて見たまへば、ただこの枕上に夢に見えつる容貌したる女、面影に見えてふと消え失せぬ。昔物

語などにこそかかることは聞け、といとめづらかにむくつけけれど、まづ、この人いかになりぬるぞと思はず心騒ぎに、身の上も知られたまはず添ひ臥して、「やや」とおどろかしたまへど、ただ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。

(夕顔 ① 166～167)

ここでの視点人物は源氏である。彼の目には、物の怪の正体が、彼が同時期に通っていた高貴な女性である六条御息所、或はその関係者であるかのように見えている。

次に引用するのは、源氏の正妻である葵上の出産の際に、物の怪がとりついて苦しめている様子である。

〈葵上1〉

大殿(=葵上)には、御物の怪めきていたうわづらひたまへば、誰も誰も思し嘆くに、御歩きなど便なきころなれば、二条院にも時々ぞ渡りたまふ。さはいへど、やむごとなき方はことに思ひきこえたまへる人の、めづらしきことさへ添ひたまへる御悩みなれば、心苦しう思し歎きて、御修法や何やなど、わが御方にて多く行はせたまふ。物の怪、生霊などいふもの多く出で来てさまさまの名のりする中に、人にさらに移らず、ただみづからの御身につと添ひたるさまにて、ことにおどろおどろしうわづらはしきこゆることもなけれど、また片時離るるをりもなきもの一つあり。いみじき験者どもにも従はず、執念きけしきおぼろけのものにあらずと見えたり。……(葵上は)ただ、つくづくと音のみ泣きたまひて、をりをりは胸をせき上げつついみじうたへがたげにまどふわざをしたまへば<sup>(10)</sup>、いかにおはすべきにかとゆしう悲しく思しあわてたり。(葵 ② 31～33)

この後、最も手ごわく葵上を苛むのは六条御息所の生霊、或は六条御息所の父大臣の死霊であると噂されていることが語られる。高

貴な身分の六条御息所が、源氏からそれほど大切にされず自尊心を傷つけられていることや、源氏の晴れ姿を見ようと葵祭に出かけた六条御息所が、正妻葵上の車と行きあって葵上の従者から酷い辱めを受けたことなどは皆の知る所となっていたからである。そして、加持祈禱を緩めてほしいと源氏に懇願する葵上の様子が、「ただかの御息所」そっくりに見えたと語るのが以下の場面である。

〈葵上3〉

(源氏が) 慰めたまふに、(葵上の口から) 「いで、あらずや。身の上のいと苦しきを、しばしやすめたまへと聞こえむとてなむ。かく参り来むともさらに思はぬを、もの思ふ人の魂はげにあくがるるものになむありける」となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るるわが魂を

結びとどめよしたがひのつまとのたまふ声、けはひ、その人 (= 葵上) にもあらず変りたまへり。いとあやしと思しめぐらすに、ただかの御息所なりけり。あさましう、人のとかく言ふを、よからぬ者どもの言ひ出づることと、聞きにくく思してのたまひ消つを、目に見す見す、世にはかかることこそはありけれど、疎ましうなりぬ。あな心憂と思されて、「かくのたまへど誰とこそ知らね。たしかにのたまへ」とのたまへば、(葵上の口から語られる様子は) ただそれ (= 六条御息所) なる御ありさまに、あさましとは世の常なり。(葵② 39～40)

この後葵上を死に至らしめる物の怪の正体は、六条御息所であることが示されている。

六条御息所は、死後にも物の怪となって光源氏の妻達を苦しめている。以下は、病中の紫上が危篤に陥り、加持祈禱によって息を吹き返した場面である。

〈紫上2〉

大殿の君は、(正妻女三宮のもとへ)

まれまれ渡り給ひて、えふともたち帰りたまはず、静心なく思さるるに、「(紫上が) 絶え入りたまひぬ」とて人参りたれば、さらに何ごとも思し分かれず、御心もくれて渡りたまふ。……(中略)……

「さりとも物の怪のするにこそあらめ。いと、かく、ひたぶるにな騒ぎそ」としづめたまひて、いよいよいみじき願どもを立て添へさせたまふ。……(中略)……いみじき御心の中を仏も見たてまつりたまふにや、月ごろさらにはあられ出で来ぬ物の怪、小さき童に移りて呼ばひののしるほどに、やうやう生き出でたまふに、うれしくもゆゆしくも思し騒がる。(若菜下 ④ 233～235)

ここで、紫上の命を奪い損ねた物の怪は、「童」に移された後、六条御息所の死霊であると自ら名乗る。彼女は、自分の娘を養女として中宮にしてくれたことは「うれしくかたじけなし」(若菜下 ④ 236) と思っはいるが、死んで「道異に」(同) になってしまうとそのような義理を忘れ、昔冷淡に遇された恨みや「心の執」(同) に引かされてここまで来てしまった、と述べ、成仏できず「苦しくわびしき炎」(同 237) に纏わされる苦しみを、先に葵上の命を奪った時と同様、源氏だけに訴えるのである。

この六条御息所の物の怪は、当時妊娠中であった女三宮にもとり憑き、出産の際に苦しめて出家に至らしめる。次に引くのは、女三宮が出家した後、物の怪が出現し、「紫上を取り戻して安心していた隙に乗じて、まだ若い源氏の正妻である女三宮を出家させてやった」と哄笑する場面である。

〈女三宮1〉

後夜の御加持に、御物の怪出で来て、「かうぞあるよ。(源氏が) いかしこう取り返しつと、一人 (= 紫上) をば思したりしが、いとねたかりしかば、この (= 女三宮の) わたりにさりげなくな

む日ごろさぶらひつる。今は帰りなむ」  
とてうち笑ふ。いとあさまじう、さは、  
物の怪のここにも離れざりけるにやあら  
む、と思すに、いとほしう悔しう思さる。

(柏木 ④ 310)

源氏最愛の女性である紫上を危篤に陥らせ、正妻女三宮を出家させたこの物の怪も、六条御息所の死霊であることが、やはり源氏の目を通して語られている。

上記4人の女性登場人物は、いずれも彼女ら自身というよりは、光源氏の不適切な振る舞いによって物の怪に取り憑かれている点が共通している。

この他にも、「物の怪」によって病む人物は病状が具体的に描かれぬものや、物の怪とも夢ともつかぬような描かれ方がなされているものなどを含めると数多く登場する。主要人物ではないが、鬚黒大将の北方も、物の怪による発作を描写されている。彼女は、執念深い物の怪に取り憑かれており、発作を起こすと大声を出して暴れたり夫に暴力をふるったりするが、それらの症状は物の怪によるものであり、彼女のせいではないと述べられている。

〈鬚黒大将の北方1〉

女君 (=北方)、人に劣りたまふべきことなし。人の御本性も、さるやむごとなき父親王のいみじうかしづきたてまつりたまへる、おほえ世に軽からず、御容貌などもいとようおはしけるを、あやしう執念き御物の怪にわづらひたまひて、この年ごろ人にも似たまはず、うつし心なきをりをり多くものしたまひて、御仲もあくがれてほど経にけれど、やむごとなきものとは、また並ぶ人なく思ひきこえたまへるを、…… (真木柱 ③ 357)

鬚黒大将の北方は、高貴な親王の嫡女として傳かれていた女性で、人柄も容貌も優れた人であったのが、「執念き物の怪」のせいで異常な様子を見せることが多いために、夫婦

仲もはかばかしくないと述べられている。

彼女は、夫である鬚黒大将が強引に新しい妻をもうけた時にも、嘆き悲しみはしても恨み怒るような態度は見せず、「(ここに)立ちとまりたまひても、(あなたの)御心の外ならんは、なかなか苦しうこそあるべけれ。よそ (=他の女性の所) にても、(私のことを) 思ひだにおこせたまはば、袖の氷もとけなんかし」(真木柱 ③ 364)と「なごやかに」(同)言いながら、新しい妻の所へ出かける夫の身支度を世話するような女性である。それが、物の怪のせいで、突然、出かけようとする夫の背後から香炉の灰を浴びせかけるという暴行に及ぶ。戯画的にも描けるであろう奇行だが、それも物の怪による乱心として同情的に描かれている。

〈鬚黒大将の北方2〉

うつし心にてかくしたまふぞと思はば、またかへり見すべくもあらずあさまじけれど、例の御物の怪の、人に疎ませむとするわざと、御前なる人々もいとほしう見たてまつる。 (真木柱 ③ 366)

彼女に非があるのではなく、物の怪が彼女を害しているのだと周囲の人々も考えている。彼女は光源氏方に敗北する家系に属する端役の人物であり、物の怪の正体が語られることもない点で、先に見た主要人物達とは異なっている。しかし、いずれも当人には予測も予防もできないような形での、他からの加害による患いとして語られている点は共通している。『源氏物語』中には、自身の為した悪行によって恨みを買ったせいで物の怪に苦しめられる人物は見いだせない。「物の怪」は、当人には予測も予防も不可能な形で他者から害されることを意味しているように見える。

### 2.3. 「あしの気」

『源氏物語』で言及される「あし」の病のうち、症状が深刻なものとして語られているのは二例である。

まず一例目は、源氏を恐れて無沙汰を続け

た柏木が口実とした詐病である。

〈柏木1〉

「……。月ごろ、方々に思しなやむ御事うけたまはり嘆きはべりながら、春のころほひより、例もわづらひはべる乱り脚病といふものところせく起こりわづらひはべりて、はかばかしく踏み立つることもかなはず、月ごろに添へて沈みはべりてなむ、内裏などにも参らず、世の中絶へたるやうにて籠りはべる。……」

(若菜下 ④ 275～276)

以前から「乱り脚病」を患っていたのが最近悪化して、歩行も困難になったのだと言う。慢性的に「乱り脚病」であったというのは事実であるためにこのような嘘をついたのか、それも含めて詐病なのかは不明であるが、「脚病」が、ありがちで、あまり外聞の悪くない病気だからこそ詐病として使われているのかもしれない。

次に引くのは、柏木の正妻であった落葉宮が、柏木の死後に、柏木の親友で義弟でもある（柏木の妹雲居雁の夫である）夕霧に懸想され、立場の弱さから夕霧に強引に踏み込まれて、母の失望や世間の批判を苦にして体調を損なっている場面である。

〈落葉宮〉

「心地のいみじうなやましきかな。やがてなほらぬさまにもありなむ。いとめやすかりぬべくこそ。脚の気の上りたる心地す」と押し下させたまふ。ものをいとさまさまに思すには、気ぞあがりける。

(夕霧 ④ 421)

このまま死んでしまいたいと言いつつ、「脚の気」が上ってきたようで苦しいと訴えている。語り手も「ものをいとさまさまに思す」つまり悩み苦しんでいるせいだと述べている。

落葉宮がこの病で死ぬことはないし、「脚の気」によって苦しむ描写もこの部分のみで比較的簡略である。しかし、ここでは、落葉宮は世間の批判と夕霧の懸想の板挟みとなっ

て疲弊しており、逼迫した境遇や絶望が病となって表れている点では、先に見た「胸」の病と共通している。

#### 2.4. 「ただそこはかとなくて物食はれぬ心地」

「ただそこはかとなくて」つまり、「どこそこにもどのような不調がある」と明確には言えないような病み方で食事が摂れなくなる、という症状が描かれているのは、柏木と宇治大君である。いずれも精神的な疲弊・絶望が直接の原因であり、死に至っている。

柏木は、女三宮との関係を宮の夫である源氏に知られ、源氏を恐れて衰弱してゆく。病状が深刻になった柏木を引き取った両親の目を通して描かれる柏木の様子が、以下の引用部分である。

〈柏木〉

さるは、たちまちにおどろおどろしき御心地のさまにもあらず、月ごろ物などをさらにまらざりけるに、いとどはかなき柑子などをだに触れたまはず、ただ、やうやう物に引き入るるやうにぞ見えたまふ。(若菜下 ④ 283～284)

急病という様子でもなかったが、一切食事を摂らなくなったために身体も著しく衰弱したという。心因的な衰弱が命を奪う様子が描かれている。

宇治大君は、妹中君に宮家の姫君にふさわしい結婚をさせたいと切望し、後見の薫の意向も受けて中君と匂宮を結婚させた。しかし中君の夫となった匂宮は、父帝や母中宮に中君との仲を反対されて中君のもとに通えず、彼が中君と宮家を軽んじていると思った大君は、中君を匂宮と結婚させた自らの判断を悔い、絶望してしまう。

〈宇治大君1〉

(大君は) なほ我だに、さるもの思ひに沈まず、罪などいと深からぬさきに、いかで亡くなりなむ、と思し沈むに、心地もまことに苦しければ、物もつゆばか

りまらず、ただ亡からむ後のあらましごとを、明け暮れ思ひつづけたまふに、もの心細くて、…… (総角 ⑤ 300)

大君は「いかで亡くなりなむ」と思い続けて食物を摂らなくなったのであり、これは緩やかな自殺ともいえるであろう。長年仕えている老女の弁も、匂宮の不義理に絶望しての不食であることを薫に告げている。

〈宇治大君2〉

(弁)「(大君は) そこはかと痛きところもなく、おどろおどろしからぬ御なやみに、物をなむさらに聞こしめさぬ。もとより、人に似たまはずあえかにおはします中に、この宮の御事出で来にし後、いとどもの思したるさまにて、はかなき御くだものだに御覧じ入れざりしつもりにや、あさましく弱くなりたまひて、さらに頼むべくも見えたまはず。

(総角 ⑤ 315～316)

「どこが痛い」というように特に悪いところも見つからない病み方で、全く食事を摂らなくなって衰弱していったという。柏木と同様に、心因的な疲弊・絶望が直接の原因で身体も衰弱し、食を断って死に至るといふ病み方が描かれている。

## 2.5. 『源氏物語』における病

以上が、『源氏物語』中で、主要人物の病苦或いは病死の様が詳述される例である。「胸」の病は理不尽に尊厳を傷つけられて発症し、「物の怪」による病苦や死の様子が詳述されたものは、当人には予測も制御も不可能な外部・他者による加害を受けたことを意味し、「あしの気」は鬱屈が原因とされ、「そこはかと」悪いところもないのに「物食はれぬ」のは生きる気力を失ったからであった。これらの病は、主要登場人物の置かれた状況や精神的な苦しみを表現する上で、大きな意味を持っており、それゆえに相当の言葉を費やして描写されたものと考えられる。

『源氏物語』には、本稿で取り上げた以外

にも病死する人物が登場するが、具体的病名や病状は語られないことが多い。たとえば桐壺更衣は、帝の偏寵によって人々の批判と怨嗟に晒され病がちになったと述べられるが、症状等は語られない。

〈桐壺更衣1〉

朝夕の宮仕につけても、人の心をのみ動かさし、恨みを負ふつもりにやありけん、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、…… (桐壺 ① 17)

〈桐壺更衣2〉

その年の夏、御息所 (= 桐壺更衣)、はかなき心地にわづらひて、まかでなんとしたまふを、(帝は) 暇さらにゆるさせたまはず。年ごろ、例のあつしきになりたまへれば、御目馴れて、「なほしほしこころみよ」とのみのたまはするに、日々重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、母君泣く泣く奏してまかでさせたまつりたまふ。

(桐壺 ① 21)

桐壺更衣が入内し寵愛を受け始めてから病死するまでが何年であるかは明記されておらず、彼女が病気がちであったのが具体的にどれくらいの期間であったのかもはっきりしないが、かなりの長期間病気があったとは述べられている。にもかかわらず、彼女の病状が具体的に語られることはない。彼女の病が、「人の恨みを負ふ」ことが積もったためであるなら、「物の怪」による病苦が描かれても不自然ではないように思われるが、例えば彼女に「執念き物の怪」が憑いていたなどは語られないのである。これは、彼女の「よこさまなるやう」(桐壺 ① 31) な死が、彼女自身の絶望<sup>(11)</sup> や特定の誰かの憎悪等によるものではなく、多くの「人」の「恨み」や「そねみ」の前に敗れたことを意味しているからであろう。

光源氏の父院や藤壺宮等も重要人物であり、その死には『源氏物語』の展開上も極め

で大きな意味があるが、彼らの死因となった病もやはり具体的に語られてはいない。

病状が詳述されるのは、その病が当該人物の境遇や内面、もしくは人間関係等を直接的に反映している場合であったといえよう。

### 3. 戯画的に描かれる病

『源氏物語』には、戯画的に描かれる、つまり罹患した人物が嘲笑される病も見られる。

以下に引用するのは、いわゆる「雨夜の品定め」において語られる、生真面目で礼儀正しくはあるが、堅苦しく魅力の乏しい「博士の娘」の様子である。ここで滑稽に語られている「博士の娘」は、語り手の式部丞が、師である博士への義理で妻にした女性である。彼女は長く無沙汰をしていた夫式部丞の久しぶりの来訪に、恨みごととも言わず、「風病」により「極熱の草葉」「蒜」を服用していて臭いのでお目にかかれないが、妻としての用事は承ろうと生真面目に述べる。

〈博士の娘〉

（式部丞）「……（博士の娘は）声もはやりかにて言ふやう、『月ごろ風病重きにたへかねて、極熱の草葉を服して、いと臭きによりなむえ対面賜らぬ。目のあたりならずとも、さるべからむ雑事らほうけたまはらむ』といとあはれにむべむべしく言ひはべり。（私は）答へに何とかは、ただ、『うけたまはりぬ』とて、立ち出ではべるに（博士の娘は）さうごうしくやおほえけむ、『この香失せなむ時に立ち寄りたまへ』と高やかに言ふを（私が）聞き過ぎさむもいとほし、しばし休らふべきに、はた、はべらねば、げにそのにほひさへはなやかに立ち添へるもすべなくて、逃げ目を使ひて、

『ささがにの振る舞ひしるき夕暮れに

ひるま<sup>(12)</sup> すぐせと言ふがあやなさ  
いかなることつけぞや』と言ひもはず

走り出で侍りぬるに、（博士の娘は）追ひて、

『あふことの夜をし隔てぬ仲ならば

ひるまも何かまばゆからまし』  
さすがに口疾くなどははべりき」としづしづと申せば、君たち、あさましと思ひて、「そらごと」とて笑ひたまふ。「いづこのさる女かあるべき。おいらかに鬼とこそ向かひぬたらめ。むくつけきこと」と爪はじきをして、言はむ方なしと式部をあはめ憎みて、「すこしよろしからむことを申せ」と責めたまへど、「これよりめづらしきことはさぶらひなむや」とてをり。（帚木 ①87～88）

博士の娘の言葉遣いは、極めて丁重ではあるが、所々に漢文訓読調が見られ、女性の話し言葉としては異様である。しかも「いと臭きにより」「この香失せなむ時に」などの直接的な表現も、婉曲に述べることをよしとする当時の美意識に照らせば下品で滑稽であろう。逃げ出す式部丞に「口疾く」歌を詠み返す様は、笑話としては出色の出来栄である。聞き手の君達も、「あさまし」「そらごと」「むくつけきこと」と評している。語り手の式部丞は、聞き手の「君達」、つまり源氏や頭中将よりも著しく身分が低く、君達に追従して彼らを楽しませるために、かつて自分がつきあった「とんでもない女」の話を、より戯画的に誇張して語っているのであろう。

『源氏物語』では、老醜の様が嘲笑されることもある。以下は、紀伊守邸に忍び込んだ源氏が、老女房に見つかりそうになる場面である。小君に案内させて部屋から出ようとした源氏は、老女房に姿を見られるが、毫碌した老女房は源氏を長身の女房と見間違え、そこにいた小君に、自分が腹を下していることを告げる。

〈紀伊守邸の老女房〉

「おもとは、今宵は上にやさぶらひたまひつる。（私は）一昨日腹を病みて、

いとわりなければ下にはべりつるを、人  
 少ななりとて召ししかば、昨晚参上りし  
 かど、なほえ堪ふまじくなむ」と憂ふ。  
 答へも聞かで、「あな腹腹。いま聞こえん」  
 とて過ぎぬるに、(源氏は) からうじて  
 出でたまふ。(空蟬 ①128)

「いとわりなければ」と婉曲に述べている  
 が、「あな腹腹」と慌てて厠へ行く様は滑稽  
 である<sup>(13)</sup>。

これらは前々節の病とは異なるものとして  
 扱われている。前節で取り上げた「病」つま  
 り『枕草子』で「病は」として列挙されて  
 いた病は、病苦の様が戯画となるようなもの  
 ではなく、物語において同情的に描写される  
 ような病であるといえるであろう。

#### 4. おわりに 病の描写

『枕草子』が「病は」として列挙したものは、  
 『源氏物語』に同情的に、或いは美的に描写  
 される病であったことを確認した。『枕草子』  
 の「病は」章段も、魅力的な人物に似合う病  
 としてこれらを挙げていると考えてよいであ  
 る。

『源氏物語』の前後、平安時代末までに成っ  
 た物語では、主要登場人物が病床に就いたり  
 病死したりする展開は多々見られても、その  
 病名や病状が具体的に詳述されることは稀で  
 あり、むしろ病や死因を詳述されるのは、悪  
 役・道化役の人物の失態が戯画的に描かれる  
 場合である。『枕草子』に挙げられた病は、  
 文芸作品において、魅力的な人物の境遇や内  
 面を反映しつつ同情的・美的に描写し得る病  
 と見なされていた、いわば例外的な病であり、  
 そのような感覚は、『枕草子』と『源氏物語』  
 が成った文化圏・時代に共通するものであ  
 ったと考えられる。『枕草子』がこれらの病を  
 何の注釈も付さずに列挙し、『源氏物語』で  
 主要登場人物の苦しみを表現するために用い  
 られた病がこれらに限られているのは、これ  
 らの病に対するそのような感覚が、当時広く

共有されていたからであろう。それは、文芸  
 的な病の描写の典型とも呼び得るのではない  
 だろうか。

#### 《注・引用文献》

- (1) 前田家本には、「胸」の後に、「腹」と見  
 える。
- (2) 前田家本・堺本には「物の怪」が見えな  
 い(ただし前田本では「物食はれぬ心地」  
 のあとに「物の怪などもよし」とある)。
- (3) 本稿における『枕草子』の引用は、新編  
 日本古典文学全集(松尾聰・永井和子  
 校注・訳 1997年11月 小学館)に拠り、  
 頁数を記した。なお、私に傍線・注記を  
 付し、表記を改めたところがある。
- (4) 歯痛に苦しむ女性の表情を魅力的とする  
 感覚は、『後漢書』梁冀伝に見える、梁  
 冀の妻孫寿が、「齟齬笑(=歯痛に堪え  
 ながら笑っているような顰めた笑顔)」  
 を流行させたという記述にも通じるもの  
 がある。

寿色美而善為妖態、作愁眉・噉粧・墮  
 馬髻・折腰歩・齟齬笑、以為媚惑。

寿は色美しく善く妖態を為し、愁眉・  
 噉粧・墮馬髻・折腰歩・齟齬笑を作し、  
 以て媚惑と為す。

(「後漢書」列伝 梁統列傳第二十四  
 228～229)

引用は『全譯後漢書』列傳3(渡邊義浩氏・  
 高橋義浩氏 編 2011年4月 汲古書院)  
 に依った。

なお、本稿では取り上げないが、『源  
 氏物語』には齟齬も言及されている。6  
 歳の藤壺宮所生皇子(後の冷泉帝)の歯  
 が黒くなっているのが愛らしいというも  
 のである。

〈冷泉帝〉

御歯のすこし朽ちて、口の内黒み  
 て、笑みたまへるかをりうつくしき  
 は、女にて見たてまつらまほしうき

よらなり。 (賢木 ② 116)

歯科医学・技術の発達していない当時にあって、齲歯は治癒不可能でかなり厄介な疾患であったと考えられるが、『枕草子』と『源氏物語』の描写からは、嫌悪感を持たれていた様子は見いだせない。

- (5) 本稿で引用した新編日本古典文学全集では、この「歯痛に苦しむ女性と胸を病む女性の描写」も「病は」章段に含める。
- (6) 『枕草子評釈 下』(金子元臣氏 1924年8月 明治書院)、『枕草子解環四』(萩谷朴氏 1983年4月 同朋舎出版)等。津島知明氏「『枕草子』類聚形式に内在する誘惑性―「病は…」章段攷―」(『國學院雑誌』第90巻第9号(1989年9月15日))に、この「病は」に列挙される病の解釈に諸説ある事、「類聚的章段」という形式が、享受者を「誘惑」して異文を生む事が論じられている。
- (7) 疫病の流行を「世の中」が「騒がし」と婉曲に述べる例は『栄花物語』等他作品にも見られる。
- (8) 村井順氏「源氏物語に及ぼした枕草子の影響」(『国文学研究』15 1957年3月)・吉海直人氏「『源氏物語』の『枕草子』引用」(片桐洋一編『王朝文学の本質と変容』散文編 2001年12月 和泉書院)等。
- (9) 本稿における『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集(阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 校注・訳 1994年3月1日～1998年4月1日 小学館)に拠り、巻号と頁数を記した。なお、私に傍線・注記を付し、表記を改めたところがある。
- (10) 破線を付した部分で、葵上を苦しめる具体的な症状が「胸」をせきあげる、というものであることが語られている。前項の「胸」の病にも含まれる例とい

える。

- (11) 桐壺更衣は、「生かまほしきは命なりけり」(桐壺 ① 23)と、帝のために生きることを切望しながら死んでゆく様が哀切に描写される登場人物である。2節において確認した登場人物達が、「物の怪」という外的な力によって害された場合以外は、生への意欲を失っていたことは、その点で異なっている。
- (12) 「昼間」と、蒜の臭う「蒜の間」を掛けている。
- (13) 『源氏物語』以外の物語でも、例えば『落窪物語』の典薬助が、寒い板敷の上で長時間待たされて腹を下す様子などは、極めて滑稽に描写され、悪役である典薬助の無様さを強調していた。